

〔英語英文学研究, 25, 67 (1980)〕

A Lady's Dressing Room の諷刺の構成

難波俊裕

Structure of Satire in *A Lady's Dressing Room*

TOSHIHIRO NAMBA

A Lady's Dressing Room は, Thus finishing his grand Survey,/Disgusted Strephon Stole away/Repeating in his amorous Fits,/Oh! Celia, Celia, Shits! (II, 115-6)の悪名高い数行を含み, Jonathan Swift の「狂気」と「絶望」の例証として批評家の最もよく挙げる詩であるが, 本論文では, 詩が成立した1730年頃のこの首席司祭の枯淡な境遇を考え, 詩の露悪の背後にある63才の Swift の人生がもはや消極的であり, これが *Gulliver's Travels* の第四部とも符牒を合せていることを指摘した。

本論の中心は詩の構造の分析である。主人公 Strephon が恋人 Celia の化粧室に忍び込み悪臭と汚物に圧倒される大筋であるが, 単なる汚物の羅列は凹面鏡の導入をもって終り, その小道具によって作者は読者をも, 諷刺の対象である主人公との「共犯関係」に陥し入れる (11, 59-75)。『化粧室』探険のクライマックスを示すのが先に引用した四行である。自ら暴いた状況と対象そのものに主人公は破滅し, その想像力はすっかり狂い, 視覚は美女に魅せられながら, 嗅覚の喚起する現実には照応しない嫌悪に圧倒される。His foul Imagination links/Each Dame he sees with all her Stinks:/And if unsav'ry Odours fly,/Conceives a Lady standing by:/ All Women his Description fits/ And both Ideas jump like Wits:/by vicious Fancy coupled fast,/ and still appearing in Contrast. (II, 119-27)

詩の狙は主人公と「共犯関係」にある読者に混乱と狼狽を犯させ, 孤高の作者が二つの教訓<If Strephon would but stop his Nose,...He soon would learn to think like me,/ and his ravished Eyes to see/ Such Order from Confusion Sprung,/Such gaudy Tulips raised from Dung (II, 134-42).>を与えることであるのは明白である。主人公の好奇心からでた愚行が平凡な知恵で嘲笑されるのだが, 主観の操作によって客観が変貌することも暗示している。つまり, この詩は, Swift の終生の命題「想像力」という「奔馬」が「騎士」である「理性」を振り落とすという, かつて自戒として挙げたイメージ (*A Tale of a Tub*, p. 114) の変奏である。

変奏と言えば, Yahoos 体験の後に, 帰国したガリヴァが家族との再会に見せる「最大の恥辱, 混乱, 恐怖」(*Travels*, pp. 288-9), 作者「私」が読者をも超えた優者であると同様に, 『旅行記』の, Swift に似た, 船長 Don Pedro Mendez が最も尊敬に値する人物と描かれていること。「墮落した理性」即ち人間という主題の共通すること。慾情ではなく「覗き見の罪で罰せられる (I, 119)」Strephon が, 11世紀, 住民の減税を数願に行く裸の Lady Godiva を覗き見て盲いたコベントリーの仕立屋の伝説に由来することを指摘できる。

これが「狂気」と「絶望」を読み取る従来の批評に敢て異をとらえ, この時期における Swift の人生への態度が消極的であったとする方が妥当とする根拠である。